大分県内のアユの遡上動向と孵化時期

内水面チーム　研究員　朝井 隆元

アユは、秋に川で産卵を行い、孵化した稚魚は海へと下って越冬し、春、川に遡上するいわゆる遡河魚類の一つです。

大分県に限った話ではないのですが、近年、河川によっては、アユが遡上する時期が昔と比べて遅くなっているのではないかとの意見が、河川漁協関係者から聞かれることがあります。アユの遡上時期の遅れは、漁期のアユの小型化に直結するため、大きな問題となります。

大分県では、アユを河川における重要魚種として1988年に、大分川、大野川、番匠川の３河川において、アユ親魚を保護して資源の増大を図ることを目的として、禁漁期間を定めた区域＝「保護水面」が設定されました。当水産研究部では、保護水面の設定後、遡上アユに関する調査を継続して行ってきました。そこで、今回、その結果の概要を紹介させていただきます。

アユの遡上盛期

投網による遡上アユの採捕結果から推測された年別のアユ遡上の盛期について、図１に示しました。投網による調査ですので、実際の遡上盛期とはズレがあるとは思われますが、番匠川では遡上盛期がやや早くなっている一方で、大分川ではやや遅くなっている傾向がうかがえます。

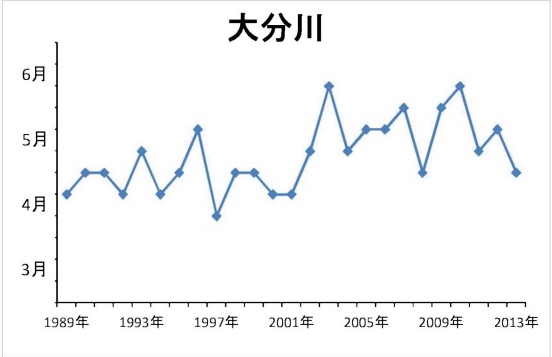
アユの孵化盛期の推定

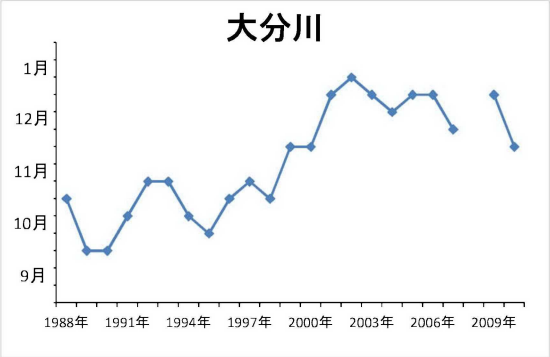
投網で採捕したアユは、遡上盛期のアユを主体として、頭部にある耳石と呼ばれる骨をから日齢査定を行っています。日齢を調べることによって、アユを採捕した日から、アユが孵化した日にちを推定することができます。図２には、採捕したアユの孵化時期の盛期の推移を示しました。この結果、３河川ともに遡上アユの孵化盛期が遅くなってきている傾向がうかがえます。

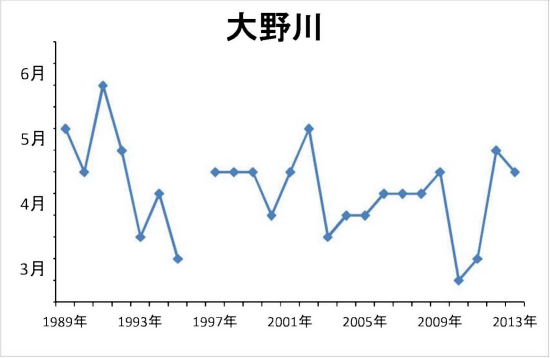
今後の課題

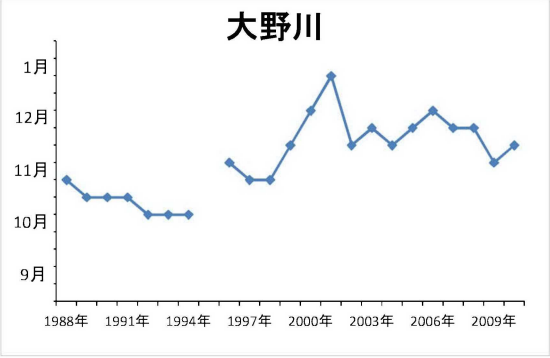
遡上アユの孵化盛期が遅くなっている傾向が認められたのは、秋の河川水温低下の遅れでアユの産卵期が遅くなっているためか、それとも早期に海に降ったふ化仔アユが何らかの理由で死滅しているために、遅晩に海へ降ったアユが主体となって春遡上してきているのかどうかは、現時点では不明です。

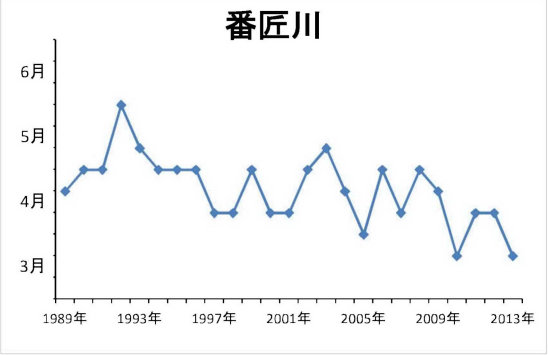
仮にアユの産卵期が遅くなっているのであれば、産卵から孵化まで要する期間を15日間と仮定した場合、以前は9月から10月を主体に産卵していたアユが、近年は、10月から11月を主体に産卵していることになります。もし、アユの産卵期間が遅くなっているのであれば、保護水面における禁漁期間の見直しの検討も必要となりますので、今後とも本調査を継続していくとともに、併せて、現在行っていないアユ親魚の調査や、冬期の海でのアユ稚魚調査についても検討していきたいと思います。











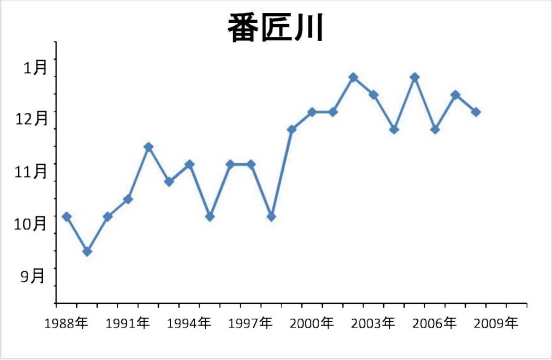


図１．アユ遡上の盛期の推移
（注）投網による定期サンプリング調査の結果最も再捕の多い時期を示した

図２．遡上アユの耳石から推定した孵化盛期の推移